米国および豪州における「都市計画遺産」選定に関する近年の取り組み

RECENT SELECTIONS OF “PLANNING HERITAGES” IN USA AND AUSTRALIA

中島直人 — * 1 津々見 崇 — * 2
佐野浩祥 — * 3 初田香成 — * 4
西成典久 — * 5 中野茂夫 — * 6

Naoto NAKAJIMA — * 1 Takashi TSUTSUMI — * 2
Hiroyoshi SANO — * 3 Kosei HATSUDA — * 4
Norihsa NISHINARI — * 5 Shigeo NAKANO — * 6

キーワード：
遺産, 都市計画史, 国際比較, リスト化

Keywords:
Heritage, Planning history, International comparison, Listing

Two recent projects for the selection of planning heritages in USA and Australia are reported systematically. Great Places in America is a flagship program of American Planning Association, which purpose is to make people recognize the values of city planning by celebrating places of exemplary character, quality, and planning. Urban and Town Planning Thematic Heritage Study is a leading academic survey for extending the concept of national heritages by the team of planning historians commissioned by the Commonwealth Department of the Environment, Water, Heritage and the Arts. By comparison between these projects, contrasting view points for planning heritages are reconfirmed.

1. はじめに

我が国の近代都市計画は、1919年の都市計画法の制定をその端緒とすると、もうすぐ百周年を迎えようとしている。ここ数年、都市計画史に関する学術書が積極的に出版され、都市計画史の若手研究者による組織的な活動も見られるようになるなど、都市計画史研究は活性化しつつある。そうした中で、「我が国の近代都市計画が現在までに生み出してきたもの、そしてその中で将来に遺していくべきものは何か」という問いのもとで、「都市計画遺産」(planning heritage)^{注1)}という概念が若手研究者によって提唱されている。日本都市計画学会創立60周年にあたる2012年には、これまでの学会賞受賞作の概要とその後を扱った記念出版物も出版されている。

本稿では、「近代都市計画が創出に関与した都市空間のうち、将来にわたって保全、継承が望まれるもの」と定義する「都市計画遺産」の選定、およびその活用に関する先進的かつ対照的な取り組み事例を報告する。具体的には、米国、豪州の両国における「都市計画遺産」選定の取り組みとして、2007年に米国都市計画協会によって開始された「アメリカの卓越した場所」(Great Places in America)プログラムと、2006年にオーストラリアで開始された「都市計画遺産リスト」作成プロジェクトに着目する。米国では1986年に米国都市・地域計画史学会(The Society for American City and Regional Planning History)が設立され、2013年10月の大会が第14回となる。豪州でも豪州都市史・計画史グループ(The Australasian Urban History / Planning History Group)が組織され、2014年2月の大会が第12回となる。このように独立した都市計画史研究学会が活動

している両国は都市計画史研究の先進国である。これらの都市計画史研究先進国における「都市計画遺産」選定の取り組みから、今後の我が国における「都市計画遺産」関連の取り組みに対する示唆を導き出したい。以上の問題意識、目的のもと、研究手法としては、両国の学協会の雑誌、ウェブサイトを対象とした情報収集、および関係者へのインタビュー^{注2)}を実施する。なお、両国の取り組み以外にも、イギリスでは1975年に王立都市計画学会が都市計画遺産をリスティングした出版物を出しており、カナダではアメリカと同様の「卓越した場所」プログラムを進めている。しかし、こうした「都市計画遺産」選定の具体的な事例について、背景、経緯、仕組み、選定の成果等の体系的な報告はなされておらず、本稿が嚆矢となる。

2 米国における「アメリカの卓越した場所」(Great Places in America) プログラム

2. 1 G Pプログラムの概要

米国都市計画協会(American Planning Association)では、2007年より、他の規範となる性格、質を有する、都市計画により生み出された場所を称揚するフラッグシッププログラムとして、「アメリカの卓越した場所」(Great Places in America、以下G Pと表記)の選出を行っている。G Pは、「本当の場所性、文化や歴史の関心、コミュニティの関与、将来のビジョンといった観点から最も良質なスタンダードを表現している」「人々がどこでどのように働き、暮らすのか、そのより良い選択肢を提供する。楽しく、安心で、希望に満ちている。人々にとって、訪れたいだけでなく、毎日でも住み、働

¹⁾ 東京大学大学院工学系研究科 准教授・博士(工学)
(〒113-8656 東京都文京区本郷7-3-1)

²⁾ 東京工業大学大学院情報理工学研究科 助教・修士(工学)

³⁾ 金沢星稜大学経済学部 専任講師・博士(工学)

⁴⁾ 東京大学大学院工学系研究科 助教・博士(工学)

⁵⁾ 香川大学経済学部 准教授・博士(工学)

⁶⁾ 島根大学大学院総合理工学研究科 准教授・博士(都市・地域計画)

¹⁾ Assoc. Prof., School of Engineering, Univ. of Tokyo, Ph. D.

²⁾ Assist. Prof., Graduate School of Information Science and Engineering, Tokyo Institute of Technology, M. Eng.

³⁾ Assist. Prof., Faculty of Economics, Kanazawa Seiryō Univ., Ph. D.

⁴⁾ Assist. Prof., Graduate School of Engineering, Univ. of Tokyo, Ph. D.

⁵⁾ Assoc. Prof., Faculty of Economics, Kagawa Univ., Ph. D.

⁶⁾ Assoc. Prof., Interdisciplinary Faculty of Science and Engineering, Univ. of Shimane, Ph. D.

きたいと思う場所である。アメリカの真に卓越した街路、近隣、公共空間は、建築的特徴やアクセシビリティ、機能性、コミュニティの関与などの多くのクライテリアによって定義される」都市空間である(文献(1))。2007年から「卓越した地区(Great Neighborhoods)」と「卓越した街路(Great Streets)」部門を毎年10件ずつ、2008年からは「卓越した公共空間(Great Public Spaces)」部門も毎年10件ずつ、選出を行っている。2013年時点で、全米50州およびワシントン特別区の全てから、「卓越した地区」70件、「卓越した街路」70件、「卓越した公共空間」60件が選定されている。

2. 2 G Pプログラムの創設経緯と狙い^{注3)}

G Pプログラムは、ユージン市、ミネアポリス市、ピッツバーグ市などで都市計画ディレクターを務め、2001年にアメリカ都市計画協会のCEOに就任したポール・ファーマー(Paul Farmer)氏の発案によって創設された。ファーマー氏は、2005年に米国都市計画協会内にブルース・ナイト(Bruce Knight)氏(2008年に米国都市計画協会会長就任)を主査とした委員会を設置し、G Pの選定プログラムの検討を開始した。6回開催された会議で、選定のための基準を作成した。その過程で、「ビューティーコンテストではない」(好き嫌いではなく、しっかり価値を分析する)、「サスティナビリティや市民参加などの要素も含める」という基本的な考え方が確認された。G Pは、インタビューでの担当者の回答の表現に従えば、複雑になりすぎたと多くの人が感じている「都市計画」への理解を促進することを目的とし、一般の市民に対して、「都市計画」の価値を示すための「コミュニケーションツール」として考案されたのである。「多くの人が都市計画をゾーニングだと思っているが、そうではない。

人々と都市計画との絆をつくる」「なぜ、その場所がよい場所なのか。「偶然ではない」ことを知らせる」「多くの人が場所の良し悪しに関心を持つきっかけとなる」「都市計画家への信頼を育てる」「しっかりと目に見えるものなので、メディアを引き付ける」「米国都市計画協会の広報戦略でもある」といった選定目標、理念が固められた。

G Pの狙いは、米国都市計画協会内組織である米国資格都市計画家協会(The American Institute of Certified Planners)が1986年以降、選定している「全国都市計画ランドマーク賞(National Planning Landmark Award、以下、N P Lと表記)」との比較からより明確に理解される。N P Lは、完成から少なくとも25年を経過したもので、都市計画に新たな方向性をもたらし、長期、広範囲の都市、地域に対して影響力を持った歴史的に重要なプロジェクトを表彰するものである。選定されたプロジェクトの中には、必ずしも実都市空間ではなく、都市計画史上に意義のあった計画そのものや条例、判決なども含まれている。G PとN P Lとの相違点は、N P Lの対象は「場所」に限定されない、ものごと、プログラム、できごとなど含むのに対して、G Pはあくまで具体的な都市空間を対象を限定しているという点にあった。また、N P Lの対象は都市計画史の観点から重要性を有するものであり、表彰自体は基本的には都市計画業界内に向けたもので、アニバーサリーなどを考慮した記念的な選定も行われるのに対して、G Pは都市計画業界の外に向けた表彰制度として設計され、選定対象となる都市空間の価値について、都市計画史上の位置付けだけではなく、後述する「特性と指定のためのガイドライン」(表1)に基づく厳格な評価が必要とされる。

2. 3 G Pの選定プロセス^{注4)}

表1 「アメリカの卓越した場所」プログラムにおける「特性と指定のためのガイドライン」の内容 ※文献(1)に基づき作成

	「卓越した地区」	「卓越した街路」	「卓越した公共空間」
定義	ある特定のプランに基づく、あるいはより有機的なプロセスの結果としての地区である。ダウンタウン、都市、郊外、超郊外、街、小集落など、様々な種類の地区が選定対象であるが、明確に感知できる境界を持っていることが望ましい。「卓越した場所」に「選定されるためには、完成後10年以上が経過している必要がある。	街路とは、公共領域とその近隣の土地利用やそれとの関わり方も含む、3次元のビジュアルコリドー全体を指す。応募に際しては、この領域を横断する街路の性格を記述する。歩道から主要車道まで、様々なタイプの街路が選定対象であるが、明確な起終点を持っていることが望ましい。街路が全ての要件を備えていること、つまりあらゆる利用者を考慮したもので、単なる自動車のための道路ではない、ということには特に強調される。	公共空間とは、近隣やダウンタウン、特別地区、ウォーターフロントなどの人々が集まる場、もしくは、その他社会的交流やコミュニティ感覚の促進を支える公共領域内のあらゆる場所のことである。プラザ、タワンスクエア、公園、市場、公共コモンズ、モール、公共緑地、埠頭、会議場やグラウンド内の公共空間、公共施設内の場所、ロビー、コンコース、民有建物内の公共空間などを含んでいる。「卓越した場所」の他カテゴリと同じく、「卓越した場所」となるためには他の場所から区別するものを見いだすことが重要である。公共空間は少なくとも完成後10年以上経過している必要がある。
特性	<ol style="list-style-type: none"> 1 居住者の日常生活に資する様々な機能を有している(例えば、住居、商業、ミクスドユース) 2 多様な交通手段を備えている(例えば、歩行、自転車、自動車) 3 デザインや建築の特徴が視覚的な面白さを有している 4 人々のふれあいや社会的活動を促進する 5 コミュニティの参加を促進し、安全な環境を確保している 6 サスティナビリティを促進し、気候変動に対応している 7 印象的な性格を有している 	<ol style="list-style-type: none"> 1 利用者に方向性を与え、より大きな通りのパターンにしっかり接続されている 2 街路に求められる相反する要求、例えば自動車、公共交通、徒歩、自転車、サービス、駐車、送迎などのバランスがとれている 3 地形にフィットし、自然の特徴を利用している 4 アーバンデザインまたはデザイン上模範となるアーバンデザインおよび建築的特徴を有している 5 隣接する用途を上手に関係づけ、継続的な活動を許容し、歩行者の隣接用途へのアクセスの提供を妨げない 6 隣接する用途を上手に関係づけ、継続的な活動を許容し、歩行者の隣接用途へのアクセスの提供を妨げない 7 人々のふれあいや社会的活動を促進する 8 大きな効果をもつハードスケープ、ランドスケープを有する 9 歩行者と自動車の安全性、24時間を通じての利用を促進する 10 流出水の最小化、水の再利用、地表水の質の確保、ヒートアイランドの最小化、手候変動への対応を通して、サスティナビリティを高める 11 よく管理されていて、余計なコストをかけないようにできている 12 印象的な性格を有している 	<ol style="list-style-type: none"> 1 人々のふれあいや社会的活動を促進する 2 安全で、快適で、全てのユーザーに対して親切である 3 デザインや建築の特徴が視覚的な面白さを有している 4 コミュニティの参加を促進する 5 ローカルな文化や歴史を反映している 6 隣接する用途としっかり関係している 7 よく手入れがなされている 8 ユニークで、特別な性格を有する
説明事項	<ol style="list-style-type: none"> 1 その地区で定住が開始されたのはいつか? 2 その地区はどこに位置しているのか、ダウンタウンか、都市エリアか、郊外か、超郊外エリア(例えば、大都市圏のフリンジ)か、集落か、小さな町か? 地区のおおよその密度はどれくらいか(例えば、エーカーあたりの住戸数など)? 3 地区の位置、物的範囲、配置はどのようにになっているのか? 地区の境界は何か? 制度や裁判などで確定した公的の境界は存在しているか(例えば、行政区やその他の可能性のある境界、近隣組織など)、それとも非公式的に定義されているのか? 4 その地区は地理的にどのくらいの大きなのか(街区の数、エーカー、その他の測定)? 5 街路の配置はどうなっているか(例えば、グリッドやカーブ状)? 街路の結節性はあるか、地区内もしくは地区を越えて、ある場所からある場所へ、回りをすることなく、車、徒歩、自転車で移動することは容易か? 6 住居、商業、小売、その他の用途の混在はどうなっているのか? 7 どのような活動や施設が日常生活を支えているのか(例えば、住居、学校、ストア、公園、緑地、業務、境界、公共あるいは民間施設、共有街路、公共交通など)? 8 居住者の中に、経済的、社会的、民族的、人口構成的な多様性は存在しているか? これらの項目における均質性や不均質性を記述せよ。 9計画(plan)や都市計画(planning)が地区の特性にどのように貢献しているのか、どのようにして特性を維持させているのか?あるいは地区はもっと有機的に形成されたもので、公式の都市計画プロセスによるものではなかったのか? 	<ol style="list-style-type: none"> 1どうやって街路を特定するのか(街区の数、起終点)? 2どこに街路が位置しているのか?ダウンタウンか、都市エリアか、郊外か、超郊外エリア(例えば、大都市圏のフリンジ)か、集落か、小さな町か。 	<ol style="list-style-type: none"> 1 その空間はどこに位置していて、その周辺環境はどのようなものか(ダウンタウン、地区、ウォーターフロント、都市中心部、業務または繁華街、歴史地区、公園など)? 2 計画(plan)や都市計画(planning)は、空間の形成に何らかの役割を果たしたのか。空間の形成を可能にする特別なゾーニングや条例があるのか? 3 どのくらいの大きさか? 4 いつ造られたのか?
ガイドライン(カテゴリのみ抜粋)	<ol style="list-style-type: none"> 1地区の形態と構成(6項目) 2地区の性格と個性(5項目) 3地区の環境と持続可能な取り組み(3項目) 	<ol style="list-style-type: none"> 1街路の形態と構成(7項目) 2街路の性格と個性(5項目) 3街路の環境と持続可能な取り組み(1項目) 	<ol style="list-style-type: none"> 1特徴と要素(6項目) 2活動と社交性(4項目) 3ユニークな質、特徴、特性(8項目)

毎年、1月から4月が候補の推薦を受付ける募集期間である。推薦は会員（4万人）からだけでなく、会員外からも受付けている。場所の成長、成熟のプロセスをも評価に含めるため、推薦対象の条件として、完成後、10年以上経過していることと定められている。8月に二段階の審査が開始される。第一段階は事務局によるレビューであり、写真、文書での審査となる。その場所の形成に都市計画がどのような役割を果たしたのか、歴史を調査し要約を作成する。その後の第二段階では、候補のある都市の都市計画部局に詳細なアンケートを実施する。アンケート回答はおおよそ4000語から6000語となり、これに800語のサマリーが用意される。

選定数は毎年30件と決められているが、審査対象として上がってくるのは60から80件である。選定にもれたものもデータベースに登録し、何らかのアニバーサリーに合わせて、再度、選定対象とすることもある。

選出が内定した時点で、選定対象のある地域に連絡する。同時にサマリーを仕上げ、ニュースをリリースする。毎年10月に発表となるが、その時点で各メディアによって報道がなされる。

2. 4 G Pの選定基準

先述のようにG Pには、「卓越した地区」、「卓越した街路」、「卓越した公共空間」という3つのカテゴリーがあるが、それぞれのカテゴリーごとに、各カテゴリーの「定義」、備えるべき基本的な「特性」、各対象の基本的な「説明事項」、およびチェックリスト形式の「ガイドライン」で構成される「特性と指定のためのガイドライン」（表1）という詳細な基準が用意されている。評価基準は、アフォーダビリティ、アクセシビリティと公平さ、環境に対する責任と持続可能性、都市や建築のデザイン、安全性など多岐にわたる。特に持続可能性といった今日的価値が明確に含まれている点は、選定基準は時代とともに変更されるべきという認識が前提となっている。

また、G Pは「傑出した地区、街路、公共空間の創造を支援するプランナーや都市計画行為の価値ある貢献を強調する」ものであると表明されているが（文献(2), p. 1）、この点は、「特性と指定のためのガイドライン」において、「卓越した地区」の「説明事項」中の「計画（plan）や都市計画（planning）が地区の特性にどのように貢献しているのか、どのようにして特性を維持させているのか」、「卓越した公共空間」の「説明事項」中の「計画（plan）や都市計画（planning）」は、空間の形成に何らかの役割を果たしたのか。空間の形成を可能にする特別なゾーニングや条例があるのか」という項目の存在により確認できる。とはいえ、「卓越した地区」の定義中に、「ある特定のプランに基づくか、あるいはより有機的なプロセスの結果としての地区である」と表現されていることから分かるように、単純に都市計画の成果というだけでなく、人間の介入と有機的な原理や偶然の組み合わせとして場所を認識しようとしている。

2. 5 G P選定の効果と課題^{注5)}

米国都市計画協会の担当者間では、G P選定の効果は、米国都市計画協会と地域の自治体職員、市民などの多様な人々とのコミュニケーションの増加として認識されている。都市計画協会は毎年10月のG P選定発表時に現地での記者会見、プレス・リリースやイベント開催などを通じて、市長や市議会、地元経済団体などさらに多様な人々を勇気づけることができていると考えている。G P自体は既に形成されたものと言う点で過去を振り返るものではあるが、同

時にそれが今後どのようにコミュニティとともにあり、どのように卓越したものであり続けるかを地域、市民とともに考え、そうした地域、市民の今後の取り組みを支援することで、G Pプログラム自体、未来を志向するものでもあろうとしている。

しかし一方で、G Pプログラムの課題は、フォローアップの仕組みがないことであると認識されている（現在、ユネスコの世界遺産のような「指定解除」の仕組みは持っていない）。選定数は200件を数えており、それらのネットワークを構築し、G P選定が観光、経済投資、新産業の開発などどのように役立ったかを確認する活動も必要と考えられている。

なお、米国都市計画協会の支部単位でも独自にG Pプログラムに取り組むことも今後の課題として認識されているが、実際に2012年にはノースカロライナ州支部で「ノースカロライナの卓越した場所」（Great Places in North Carolina）プログラムが創設されている。また、G Pプログラムをモデルとして、2011年より、カナダ都市計画家協会（The Canadian Institute of Planners）は「カナダの卓越した場所」（Great Places in Canada）コンテストを開催し、選定を開始している。こうしたG Pプログラムをモデルとした地方展開、国際展開も、選定の効果の一つである。

3. 豪州における「都市計画遺産リスト」作成プロジェクト

3. 1 都市計画遺産リスト作成の経緯と背景

（1）豪州の遺産制度

豪州では遺産を、連邦政府、州政府、自治体の三層で扱っているが、連邦政府レベルでは現在、環境省（Department of the Environment）が遺産制度を所管している。連邦政府は1999年に成立した「環境保護および生物多様性保全法（Environment Protection and Biodiversity Conservation Act 1999、以下「EPBC法」と略）」に基づいて、全国的・国際的に重要な植物、動物、生態系のコミュニティ、そして文化遺産的場所を国家的重要性の観点から選定し、保護し、維持管理することとなっている。EPBC法が適用される国の環境的重要性（national environmental significance）の項目は、①世界遺産、②国家遺産、③国際的に重要な湿地帯、④絶滅危惧種・絶滅が危惧される生態系、⑤渡り鳥、⑥連邦海域、⑦グレートバリアリーフ海洋公園、⑧ウラン採掘を含む核に関する事項、⑨炭層ガスの開発と大炭鉱の開発に関連する水資源、の9つであり、これらを対象として、a. 環境保護、特に国の環境的重要性の項目の規定、b. 保全を通じた生態学的に持続可能な開発と、生態学的に持続可能な天然資源利用の推進、c. 生物多様性の保全の推進、ca. 遺産の保護・保全の規定、d. 政府・地域・地権者・先住民を含めた、環境の保護管理の協力的アプローチの推進、e. 豪州の国際的な環境上の責任の協力的実現の支援、f. 豪州の生物多様性の保全と生態学的に持続可能な利用における先住民の役割の認識、g. 知の所有者の関与と協力による先住民の生物多様性に関する知識の利用の推進、を行うとしている。このように豪州連邦政府における遺産制度の対象範囲には、世界遺産や国家遺産に加え、生態系や海洋公園など多様なものが含まれており、各分野での具体的な規制や保全方策が個別の法律によって規定されている。

上記②国家遺産（national heritage places）制度では、EPBC法が対象とする他の種類の遺産と同様に「遺産リスト」が作成され、

表2の9つの評価基準のうち少なくとも1つ以上に該当することで国家遺産として登録され、それが遺産保護施策の前提となる。

表2 国家遺産の評価基準 ※文献(3)に基づき作成

(a) 豪州の自然・文化史において、国家的に顕著な遺産的価値を有する場所
(b) 豪州の自然・文化史の観点から貴重・希少なあるいは絶滅寸前の、国家的に顕著な遺産的価値を有する場所
(c) 豪州の自然・文化史の理解増進に資する情報をもたらす、国家的に顕著な遺産的価値を有する場所
(d) 自然・文化に関する場所もしくは環境の一分類の主たる特徴を示す、国家的に顕著な遺産的価値を有する場所
(e) コミュニティあるいは文化的集団によって価値づけられた審美性が表出する、国家的に顕著な遺産的価値を有する場所
(f) 特定の時代の高い創造性あるいは技術の実績が体现された、国家的に顕著な遺産的価値を有する場所
(g) 社会的、文化的、精神的理由による特定のコミュニティあるいは文化的集団に強く、もしくは特別に関連する、国家的に顕著な遺産的価値を有する場所
(h) 豪州の自然・文化史において重要な人物あるいは組織の人生や業績に特に関連する、国家的に顕著な遺産的価値を有する場所
(i) 先住民族の伝統の一部として、国家的に顕著な遺産的価値を有する場所

これらの基準によって、都市計画に関する遺産についても評価が行われている。例えば「アデレードの公園緑地と都市配置(The Adelaide Park Lands and City Layout)」については、(a), (b), (d), (f), (g), (h)に該当するものとされている(文献(4))。

(2) 都市計画遺産のリスト化の背景

豪州における「都市計画遺産(planning heritage)」のリスト化の発端は、2006年、連邦環境・水・遺産・芸術省(the Commonwealth Department of the Environment, Water, Heritage and the Arts, DEWHA、現環境省の前身)が、EPBC法に基づく国家遺産の枠組みを拡げようと、豪州の都市計画についての国家的な歴史を調査し、関連遺産の評価決定に向けた研究「都市計画を主題とする遺産研究(Urban and Town Planning Thematic Heritage Study)」をニューサウスウェールズ大学(New South Wales Univ., UNSW)の都市未来研究所(the City Futures Research Centre)に委託したことにある。このプロジェクトは同大教授のロバート・フリーストン(Robert Freestone)氏をはじめ、南オーストラリア大学のクリスティン・ガーノー(Christine Garnaut)氏、南オーストラリア職業歴史家協会のスーザン・マースデン(Susan Marsden)氏、UNSWのサイモン・ピネガー(Simon Pinnegar)氏の4人をコアメンバーとして取り組まれた。この結果は、国家遺産リストの都市計画部門の選定評価基準に活用されている。DEWHAでは同時期にいくつかの分野に関する遺産研究を委託しており、「都市計画遺産」については「象徴的景観」として位置付けられた^{注6)}。

フリーストン氏はこのプロジェクトを、都市計画史に対する「遺産」という捉え方の構築、また豪州都市計画史の集大成を行う機会、という2つの動機で取り組んだ^{注7)}。実際の遺産を巡るような調査は行わず、文献資料の読み込みや既存の研究蓄積の活用、後述するアンケート調査、および各州の遺産部門担当者へのインタビューによる確認作業を実施した。その後、豪州都市計画遺産の全体像のまとめ(後の『Urban Nation』の草稿となった)、重要と思われる遺産候補の詳細な記述と遺産化への手法論を記したものの、2巻組の報告書を作成し、連邦政府へ提出した。連邦政府としては本来国家遺産のみが対象であり、5つか6つの国家遺産リストへの候補の提案を想定していたが、研究チームでは州レベル・地方自治体レベルの

ものも含めた数百に及ぶ遺産選定を提案するに至っている^{注8)}。

3. 2都市計画遺産の選定作業

(1) 豪州都市計画遺産の選定に関する理念

豪州は、計画的に作られた入植地が現在の都市の起源であるものが多いことから、「都市の国(Urban Nation)」と言われ(文献(5))、広義の都市計画が地域の景観の構造と発展に大きく影響していると認識されていたものの、「計画」のとらえがたい性質や、制度・規制に起因する否定的なイメージから遺産として扱われず、歴史の教科書においても同様であった。フリーストン氏らは、都市計画史や都市計画遺産を通じて豪州の歴史を文化的に理解し、批判的な考察を促し、将来的な「貧弱な意思決定」を監視できるようにすること、また建築・造園等と同様に都市環境への貢献の記録・評価を体系的に行うことを企図した(文献(5))。同時に、リスト化のプロジェクトを、従来、局地的に行われてきた都市計画史研究を拡張し、「都市計画」を主題とした時間的・空間的により広範な保存や遺産化を促す新たな試みとして位置付けた。これらを受けて、①都市化と都市生活に関連する計画の成果を調査すること、②計画そのものと共に、計画実践の発展につながる幅広い制度上の文脈を明らかにすること、③全世界的に明らかにされている都市計画の大きな流行や傾向の影響をオーストラリアも受けており、デザイン史の背景もある程度明らかにすること、④町の建設や計画はヨーロッパ人の入植事業の一部として扱うヨーロッパ中心主義を範囲とし、アボリジニ文化は扱わないこと、の4つの研究ポリシーが設定された。

(2) 都市計画遺産の評価基準の検討とリスト作成の手続き

i. 国家遺産としての評価基準

フリーストン氏らは、前述の国家遺産の評価基準を土台とし、米国の国家歴史的ランドマーク(US National Historic Landmarks)などの様々な既存の評価基準を参照しながら、「都市計画遺産」について、「場所の審美的なデザイン」「革新的計画概念を導入した技術的業績」「持続可能な環境の質を高める貢献」「新たなコミュニティの創造」「国家の経済文化社会発展史」「計画の運動、計画のプロフェッション、著名なプランナー」の6つの評価基準を設定した。

ii. テーマの分類

さらに「都市計画遺産」に固有の歴史的テーマとして、①首都の建設(州都を含む)、②計画的農村、③大都市拡大への対処、④郊外コミュニティ計画、⑤都市の更新(再開発)、⑥公共部門(計画によるオープンスペース、景観など)、の6つが設定された。なお、このテーマ設定は、後述する『都市の国(Urban Nation)』でも踏襲されている。

iii. 専門家による遺産推薦アンケートの実施

ピネガー氏及びフリーストン氏は、2006年5月～8月にかけて、インターネットWebサイトを用いた、「都市計画遺産」の候補に関するアンケート調査を実施した(文献(6))。豪州都市計画学会(Planning Institute of Australia, PIA)の機関誌『Australian Planner』を通じて会員に告知した他、メールニュースでの告知も行うなど、PIA会員を主要回答層に設定した。同時に、11の他学会・グループの電子ニュースレターにも回答を呼び掛ける告知を掲載した。その結果、Web以外からの回答も含めて、111通の回答が得られ、「都市計画遺産」の候補としては100か所弱が挙げられた。

遺産資源の種類別(表3)では、計画された入植地が42%で最多

となり、豪州らしい歴史を持つ遺産が注目された。その他、オープンスペースや郊外住宅地、景観や中心市街地など幅広く推薦された。

また、推薦する資源が遺産としてどのような点で特徴的なのかという設問（表4）に対しては、「歴史上の出来事やテーマと結びついている」「計画理論・コンセプトを代表する」が共に2/3近くの回答を得て最多であり、続いて「唯一性」「デザインの秀逸さ」「特定の計画家や計画の職能と結びついている」が各4割強となった。豪州の歴史的個性との関係性や、都市計画の固有性、つまり都市計画史上の意義が重視される傾向にあった。

表3 遺産資源の種類別のノミネート数上位 ※文献(6)に基づき作成

Type of Place	Total	Percent
Planned Settlement	47	42%
Public and open space	30	27%
Suburb or suburban estate	29	26%
Spatial framework	26	23%
Landscape	26	23%
Precinct	21	19%
Building or structure	20	18%
Town centre	16	14%
Other, please specify	14	13%

表4 その遺産資源を回答者が重要だと思う理由 ※文献(6)に基づき作成

Criterion	Total	Percent
Connection to historical events or themes	71	64%
Representation of planning theories and concepts	70	63%
Uniqueness	50	45%
Excellence in design	48	43%
Association with particular planners and the planning profession	46	41%
First of its kind	37	33%
Best of its kind	20	18%
Other, please specify and expand your reason	13	12%

iv. リストの絞り込み

以上の調査を踏まえて、研究チームでは、表5に示す10項目のチェックリストを用いて、「都市計画遺産」のリスト確定のための絞り込みを行った（文献(7)）。これに加えて、複数の類似する遺産については、その完全性や損傷状態を考慮しながら除外・統合を行った。

表5 都市計画遺産リストアップのためのチェック項目

- (1)歴史テーマとの関連性
- (2)研究論文で対象になっている
- (3)Web 調査で対象になっている
- (4)遺産リストで対象になっている
- (5)史料が良い状態で残っている
- (6)学術的な価値が証明されている
- (7)コミュニティにとっての価値が証明されている
(遺産に関する本の出版、市民グループの主張など)
- (8)空間的保全性(無傷、状態)
- (9)国家の履歴(一地域を超えた重要性)
- (10)古さ(古いほど価値がある)

さらに政府との協議を行い、国家遺産の評価基準から(c)（遺跡に関連する）と(i)（近代都市社会ではない）を削除し、他の指標を都市計画の言葉に言い換えて精緻化し、「都市計画遺産」の評価基準を完成させた（文献(7)）（表6）。

また、同種同等の遺産間における絞り込みを行うため、表7に示す5つの基準を閾値として設定した。

以上の手続きを通じて、研究チームでは国家遺産のための「都市計画遺産」の暫定リストを作成した。23か所の「都市計画遺産」が

掲載されたこの前提リストの作成の際には、地理的な分布（州間のバランス）、遺産のテーマ・種類のバランスも考慮された^{注8)}。

表6 「都市計画遺産」の評価基準

- (a)国家の文化史において重要な場所
 - (1)国家の開発史において重要な出来事や場所を代表するもの
 - (2)国家の開発史において重要な経緯や時代を代表するもの
- (b)国家の文化史の観点から珍しい、貴重なあるいは絶滅寸前の場所
- (d)国家の文化的場所または文化的環境の特徴が顕著に示される場所
- (e)コミュニティあるいは文化的集団によって価値づけられた審美性が示される場所
- (f)ある時代の高い創造性あるいは技術が体现された場所
 - (1)概念、デザイン、事業において革新的なもの
 - (2)国際的なデザインと開発に影響を受けた記録
- (g)社会的、文化的、精神的理由による特定のコミュニティあるいは文化的集団に関連する場所
 - (1)国家的観点からの生活様式や特徴的な文化
 - (2)主要な計画がコミュニティに息づいている
- (h)国家の文化史において重要な人物あるいは組織

表7 遺産絞り込みのための基準

- (1)国家レベルで計画史に直接かつ実証的関係のある場所
- (2)その空間的計画と計画史に関して利用可能な史料が多くある場所
- (3)計画の全体像と鍵となる要素に損傷なくデザインの意図が反映されている
- (4)同様のものに比べて古く、実現性が高く、損傷のないもの
- (5)学術的に／コミュニティにとって計画が高く永続的に評価されている

表8 都市計画遺産の暫定リスト

テーマ:①首都建設、②大都市膨張の構造化、③計画的郊外地域、④公共部門、⑤都市更新、⑥計画的農村集落

遺産名	都市、州／特別地域	テーマ
Metropolitan Canberra	ACT	①②③④
Macquarie Street, Domain, Royal Botanic Gardens and Hyde Park	Sydney, NSW	①④
Appian Way	Sydney, NSW	③
Daceyville	Sydney, NSW	③
Castlecrag	Sydney, NSW	③
Australia Square	Sydney, NSW	⑤
Bathurst	NSW	④⑥
Albury-Wodonga	NSW/Victoria	⑥
RAAF Base precinct	Darwin, NT	③
Anzac Square	Brisbane, Qld	④
Plan of Adelaide	Adelaide, SA	①④
Hahndorf	SA	⑥
Colonel Light Gardens	Adelaide, SA	③
Elizabeth		②③
Woomera	SA	⑥
Lutana	Hobart, Tas	③
Plan of Melbourne	Melbourne, Vic	①④
Garden City	Fishermens Bend, Vic	③
St Vincent Place	South Melbourne, Vic	③④
Johnstone Park Civic Complex	Geelong, Vic	④
Perth Endowment Lands plan	Perth, WA	①③
Kwinana	Perth, WA	①③
Benedictine Monastery Precinct	New Norcia, WA	⑥

3. 3 暫定リスト作成後の動きと活用の方向性

研究チームはこのプロジェクト後、報告書をもとにした書籍『都市の国 (Urban Nation)』出版のための助成金を政府より受けている。2010年に出版された同書は、現在、第2刷が出されるに至っている。出版賞^{注9)}を受賞した他、好意的な書評も出ており、学術的には一定の成功を収めたと認めることができる。

ただし、オーストラリアでは、国家遺産に選定されたものを除き、

暫定リストに掲載された「都市計画遺産」を組織的・網羅的に保全・活用するような動きが生み出されるまでには至っていない。リスト化により、州や地方自治体政府の遺産への再認識を促し、何らかの施策の検討が開始されることを期待する程度となっている。また「都市計画遺産」に関する表彰制度等もない。

一般市民への啓発という側面においては、『都市の国 (Urban Nation)』が大学での都市計画史の講義用教科書として活用されているにとどまる。例えば、観光客にアピールする資源という捉え方も想定されていない。現段階では、職業プランナーや遺産保全分野の専門家、大学生といった、「都市計画遺産」関連分野に直接関わる人々への発信に留まっている段階である。

4. まとめ

以上、米国と豪州の最近の「都市計画遺産」のリスト化の事例を紹介してきた。ともに「近代都市計画が創出に関与した都市空間」の価値付けを行う取り組みであったが、その目的や主体、リスト化プロセス、選定基準等は、対照的であった(表9)。「アメリカの卓越した場所」プログラムは、いわゆる文化財保護という観点からの遺産選出ではなく、都市計画の価値を示すコミュニケーションツールとしての遺産であり、アウトリーチの一環としての選出であった。一方で、「都市計画遺産リスト」作成プロジェクトは、国家的な文化財の観点からの保護という観点から、都市計画史の学術的蓄積のもとで遺産の枠組みを拡大することに主眼が置かれていた。この違いはそれぞれの取り組みの主体の性格からも説明できるし、公募型か専門家の意見集約型かというリスト化のプロセスの違い、空間特性評価と歴史的価値評価という選定基準の違い、公表時のメディア活用や地域との関係構築の違いにも顕れている。これらの相違点を、「都市計画遺産」固有の問いとなる「都市計画」が遺産をどのように規定するのかという視点で総括的に整理すると、個々の場所を都市計画とそれ以外の有機的な原理や偶然的な組み合わせとして捉える空間履歴的アプローチと、国家の文化史の一つとしての都市計画史の物証として捉える全体史的アプローチの二つが、それぞれの取り組みから抽出されるのである。

表9 米国、豪州の「都市計画遺産」選定の取り組みの比較

実施場所、時期	「アメリカの卓越した場所」プログラム	「都市計画遺産リスト」作成プロジェクト
価値・位置付け	・都市計画の価値を示すコミュニケーションツール ・都市計画のアウトリーチ	・国家遺産の枠組みの拡大 ・都市計画史研究の集大成
選定数	200(2013年現在)	23(暫定リスト)
主体	・アメリカ都市計画協会	・連邦環境・水・芸術省 ・ニューサウスウェールズ大学都市未来研究所
リスト化・選定プロセス	・(主に会員からの)推薦 ・事務局による写真、文書作成 ・行政担当者へのアンケート	・文献調査 ・行政担当者へのインタビュー ・専門家へのアンケート
選定基準	主に空間特性の評価	主に歴史的価値の評価
公表形態	記者会見、選出イベント メディア報道	書籍出版
都市計画の規定性	都市計画という人間の介入と有機的な原理や偶然的な組み合わせ	国家の文化史の一つとしての都市計画史の物証

注

注1) “planning heritage” という用語を意図的に用いた最初の著作は、R. Taylor et al., *Britain's Planning Heritage*, Royal Town Planning Institute, 1975 である。同書はガイドブックの形式を取っており、単に古い歴史的遺産だけでなく、近現代の都市計画の遺産である「Garden Cities」「Modern New Towns」「Town Expansion Schemes」等を積極的に取り上げている。

る。また巻末の用語解説でも近現代の都市計画に関連する法律等について解説を加えている。

注2) 実施したインタビューは以下のとおり。①「卓越した場所」プログラムについて(2012年3月6日、米国都市計画協会(ワシントンDC)にて、対象者: Jeffrey Soule 氏(米国都市計画協会国際プログラムおよびアウトリーチ部門ディレクター)、Denny Johnson 氏(米国都市計画協会広報部門コーディネーター)、Stacey Williams (米国都市計画協会アウトリーチ部門アシソシエイト)、インタビューア: 中島直人、初田香成)、②「都市計画遺産リスト」作成プロジェクトについて(2012年2月28日、ニュー・サウスウェールズ大学にて、対象者: Robert Freestone 氏(ニュー・サウスウェールズ大学教授)、インタビューア: 佐野浩祥、津々見崇)

注3) 創設経緯と狙いの記述は、米国都市計画協会でのインタビュー結果に基づく。

注4) 選定プロセスの記述は、米国都市計画協会でのインタビュー結果に基づく。

注5) 選定の効果と課題の記述は、米国都市計画協会でのインタビュー結果に基づく。

注6) フリーストーン氏へのインタビューより。

注7) フリーストーン氏へのインタビューより。

注8) フリーストーン氏へのインタビューより。

注9) 例えば、15th biennial conference of the International Planning History Society における特別出版賞。

参考文献

(1) American Planning Association, *Great Places in America*, <https://www.planning.org/greatplaces/>, 2014.6.18 最終閲覧 ※本頁からリンクされている Characteristics and Guidelines も含む。

(2) American Planning Association, *Great Places in America: Great Streets and Neighborhoods, 2007 Designees*, Planning Advisory Service Report Number 552, American Planning Association, 2008

(3) Department of the Environment, National Heritage List criteria, <http://www.environment.gov.au/topics/heritage/about-australias-heritage/national-heritage/national-heritage-list-criteria>, 2014.6.14 最終閲覧

(4) Department of the Environment, Australian Government, “The Adelaide Park Lands and City Layout, South Tee, Adelaide, SA, Australia”, Australian Heritage Database, http://www.environment.gov.au/cgi-bin/ahdb/search.pl?mode=place_detail;place_id=105758, 2014.6.15 最終閲覧

(5) Robert Freestone, *Urban Nation -Australia's Planning Heritage-*, CSIRO Publishing, pp.vii-x, 1-5, 2010

(6) Simon Pinnegar, Robert Freestone, Identifying Australian sites of urban planning heritage: Results from a national web-based survey, *Australian Planner*, 44(4), pp.36-43, 2010

(7) Robert Freestone, Susan Marsden & Christine Garnaut, A Methodology for Assessing the Heritage of Planned Urban Environment: An Australian Study of National Heritage Values, *International Journal of Heritage Studies*, 14(2), pp.156-175, 2008

※本研究は JSPS 科研費 30345079 の助成を受けたものである。

[2014年6月18日原稿受理 2014年10月30日採用決定]